

## II 事業報告



# 1. 看護生涯學習専門部会



1-1)-①

事業名	公開講座開催事業
対象	一般住民
事業組織	川原 瑞代、大館 真晴、甲斐 鈴恵（宮崎県立看護大学）
事業計画	<p>目的：</p> <p>1) 公開講座の開催 大学の有する知的財産、人的資源等を広く地域社会に開放し、社会における大学の使命を果たす。</p> <p>2) 県民の学習ニーズに相応した公開講座の在り方の検討</p> <p>実施内容：</p> <p>1) 公開講座の開催（夏講座、秋講座）</p> <p>2) 住民および自治体への学習ニーズ調査</p>

#### <実施状況及び結果>

##### 1) 一般住民を対象とした公開講座

###### ①夏講座

8月～9月に5回の講座を実施し、延80名が参加した。講座の内容は、子育て世代から壮年期の時期にそれぞれ関心のあるテーマであり、参加者の評価は良好であった。広報活動は、県政けいじばん、大学周辺地域の回覧板、新聞広告等で行った。

###### ②秋講座

宮崎県立図書館との共催で行い、会場をより利便性のある宮崎県立図書館に移して、計5回開催した。「文化に親しむ」という一貫したテーマのもとに「置県130年記念公開講座」と位置付け、著名な講師を招聘し、広く関心が高まるプログラムを開いた。また、ポスター、チラシの配付、新聞やテレビでの広報活動を推進した。その結果、参加者数が合計350名となり、昨年度（45名）に比べ大幅増になった。参加者の評価は良好であった。

##### 2) 住民および自治体への学習ニーズ調査

###### (1) 県民の学習ニーズ調査Ⅰ

10月26日（土）の秋講座「宮崎の文化に親しむ」講座の参加者へアンケート調査を行った。（回収数54名）。60歳代が25名（46.3%）と最も多かった。また、70歳代7名、80歳代3名の参加があり、高齢の世代の高い関心が伺えた。居住地別では、51名（91.1%）が宮崎市内居住でアクセスの良い地域からの参加が多数であった。公開講座についての情報は「ポスター・チラシで知った」24名（44.4%）が最も多く、次に「新聞」や「知人」がそれぞれ12名（21.4%）であった。参加の目的は「知識・教養を深める」が最も多く33名（58.9%）、「余暇を楽しむ」が19名（33.9%）であり、この2項目が男女問わず学習ニーズとして大きな目的となっていた。講座全体に関しての評価は良好であった。

## (2) 県民の学習ニーズ調査Ⅱ

平成 25 年 3 月に、県内の全市町村の主に住民対象の「公開講座」を担当する生涯学習担当部署、健康づくり担当部署の担当者 56 名に調査を行った。アンケート回収数は 30 であった。

自治体が公開講座を開催する際に困難な点、課題は、①予算の確保 ②魅力ある企画とならず参加者を集められない ③講演会を企画・運営する労力が多大でマンパワー不足 ④参加者（世代）の固定化 ⑤広報手段の固定化 ⑥費用対効果や評価が困難等であった。多くの自治体が、予算や企画で苦慮しており、小規模な自治体では、公開講座 자체を開催していないところもあった。

本学の教育・研究情報について 14 件 (46.7%) が「知らない」と回答した。大学情報についての周知は大きな課題である。県下の自治体と共同した公開講座の在り方を検討する為に、要望を収集した。その結果、平成 26 年度の合同開催を希望する自治体が 3 自治体あった。これらの自治体の希望する講座内容は、「生活習慣病予防に關すること」(2 件)、「ストレスと身体変化」「西諸地区的記紀」「キャリア教育」であった。また、27 年度以降の合同開催を希望した自治体は 5 自治体であった。これらの自治体の希望する講座内容は、「生活習慣病予防」「子どもと食育、健康な体づくり」「地域の中で子どもを育む」などであった。

### <評価・改善点>

- ・秋講座の県立図書館との合同開催は効果的であった。
- ・夏講座は参加者が少なく、講座内容や開催時間の改善が必要である。
- ・宮崎市以外の地域での開催への希望があり、地方での開催を検討する。
- ・広報の充実や学習環境の整備を行う（室温調整やマイクの調整、静かな学習環境への配慮）
- ・大学の専門性を活かした内容を、学習基盤が少ない受講者にでも分かり易く、生活の中で活かしていける具体的な内容や地域性に合ったテーマ設定が必要。

### <来年度の計画>

- ①県立図書館との共催を継続し、「秋講座」は、宮崎市以外の 2 カ所の地域でも年 2 回以上の公開講座を開催し広く宮崎県民へ寄与する。
- ②「夏講座」は、県立看護大学を中心に、生活習慣予防に重点をおいた一貫した内容の 3 回～4 回の継続プログラムで実施する。
- ③平成 26 年度の本学との「公開講座」の共同開催を希望した自治体との連携を図り地域での公開講座実現にむけて調整を図る。

記載責任者	川原 瑞代
-------	-------

平成 25 年度 公開講座実績

【夏講座】

回	日時・場所	テーマ	講師・内容	参加者
1	8月2日(金) 14:00~ 15:30  高木講堂	予防医学への いざない～生 活力アップで 病気予防！	江藤敏治 (宮崎県立看護大学 教授)  生活習慣病には食習慣や運動習慣およびお酒、タバコが大きく関与。最近ではこれらに加え、生き方、生きる活力が心をはじめとした体の病気に強く関係することが分かってきた。自分らしく、生き生きと明るく元気に過ごせる過ごし方について教授。	50名
2	8月22日(木) 10:00~ 12:00  多目的ホール	地域の中で子 どもを育む —子どもの育 ちと子育て支 援—	花野 典子 (宮崎県立看護大学 教授)  子どもを育てる環境はたくさんの人々に支えられてこそ安心した子育てができます。子どもの成長発達を促しながら、子どもが幸せに育まれるために必要なことについて考える。	12名
3	8月26日 (月) 13:30~ 15:30  小講義室4	わたしの「器」	Eric E.Larson (宮崎県立看護大学 准教授) 伊藤五恵 (現代陶芸家)  「焼き物」制作。豆皿ほか。制作後は、焼き物の講話 と歓談。	8名
	8月29日(木) 10:00~ 12:00  多目的ホール		花野 典子 (宮崎県立看護大学 教授)  虐待は、社会問題の1つである。虐待の現状と予防について、私たちに何ができるかを考える。	
4	9月5日(木) 15:00~ 16:30  実習室他	地域の中で子 どもを育む —子ども虐待 防止のための 子育て支援を 考える—	武田千穂(宮崎県立看護大学 助手 感染管理認定看護 師) 勝野絵梨奈 (同大助教)  感染から身を守るため、普段の生活の中で気を付けて おきたい基本のポイント「手洗い・うがい」「吐物・下 痢の安全な処理の仕方」などについて、親子で楽しく 学習する。	5名

【秋講座】 置県 130 年記念公開講座 - 宮崎の文化に親しむ

会場：宮崎県立図書館 研修室

回	日時	テーマ	講師	参加者
1	8月31日(土) 14:00-15:30	宮崎の生んだ光と影の歌人 —若山牧水と小野葉桜—	伊藤一彦 (宮崎県立図書館名誉館長 宮崎県立看護大学客員教授)	50名
2	9月7日(土) 14:00-15:30	記紀を学ぶ人のために -宮崎県立図書館の蔵書を利用して-	大館真晴 (宮崎県立看護大学准教授)	50名
3	9月14日(土) 14:00-15:30	名作の舞台となった宮崎 -宮崎を訪れ愛した人びと-	伊藤一彦 (宮崎県立図書館名誉館長 宮崎県立看護大学客員教授)	50名
4	9月21日(土) 14:00-15:30	古事記になぜ日向神話が記された のか	大館真晴 (宮崎県立看護大学准教授)	50名
特別 講 演	10月26日(土) 14:00-15:30	【基調講演】 神話と歴史 -信じることと学ぶこと- 【対談】 旅の始まりは宮崎から -古代文学の西と東と-	上野誠 (奈良大学教授)  上野誠 伊藤一彦、大館真晴	150名

事業名	親子で楽しく『輪ツハッハ！』教室
対象	未就学児をもつ親子
事業組織	松本 憲子、壹岐 さより（宮崎県立看護大学） 他保健師1名、助産師1名、看護師1名、保育士2名
事業計画	<p><b>目的：</b>        子ども、家庭及び地域社会の相互の連携を図ることにより、母親の育児不安等に関する早期対応を可能にし、地域社会における子育て支援の基盤づくりを目的とする。また、少子化で乳幼児との関わりの経験の少ない学生が、子どもたちと触れ合える場を提供し、乳幼児の発育発達及び、子育てについての理解を促す。</p> <p>さらに、母親による虐待の増加に歯止めをかけるために母親の育児力向上をめざし、子育て中の母親ニーズと育児力の実態から、支援の方向性を明らかにし、宮崎県全体の母親の育児力の向上を図る。本年度は、県内の小児科の医師不足を補うためにも母親の育児力形成の支援のための実態調査を行う。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 参加親子を1年間継続して参加できることを条件に募集し、大学内にて月2回程度の子育て教室を開催する。教室の内容として親子の触れ合い遊び・リズム、リラクゼーション・読み聞かせ・工作・音楽遊び・健康教育、近況報告などを行う。</li> <li>2) 子育て相談(面接・24時間メール相談)</li> <li>3) 1歳児を育てる母親の育児力尺度の開発</li> <li>4) 小児夜間救急電話相談実態調査 &lt;日南・串間地区&gt;</li> </ol>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <p>①子育て教室の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て相談(面接・24時間メール相談)、児の発育発達評価・相談(身長、体重測定等) ママの広場、(母親交流、リラックスタイム、おやつ作り等)、遊びの広場(母と子のふれあい、読み聞かせ等)、学生による健康教育</li> </ul> <p><b>&lt;実施&gt;</b></p> <p>未就学児の親子を対象とした教室を月に2回開催し、参加者数640名、母親の育児力向上と学生の教育の場となっている。参加している親子の中には、子どもの発達に悩みをもつ親子も参加している。また、保健所や発達支援等の公的な場で、子どもには問題がないが、育児困難感が解決できない母親が当教室を紹介され、参加している。育児困難感のある母親は、教室で行う活動、近況報告を通してお互いの子の成長発達の共有、専門家の助言、母親同士のつながりを深めることによって、育児困難感の解決ができ、母親の安定が図られることにより、子どもの成長発達も促されている。</p> <p>また、子育て支援を行っている支援者のフォローとして、食育に関する調理実習や講話・支援者の相談も行った。</p> <p>育児力向上への支援としては、平成24年度に行った1歳児を育てる母親の育児力実態調査から、1歳児を育てる母親の育児力を測定するスケールを作成した。今後は、このスケールを活用し、支援していく予定である</p> <p>②個別カウンセリング(輪ツハッハ！カフェ♪)の開催</p> <p><b>&lt;実施&gt;</b></p> <p>集団のフォローでは、問題解決に至らない母子を対象に個別支援を行った。個別支援では、母親の生活過程や現在の家族関係等も含め、育児における困難感や不安が解決できるよう支援した。また、同時に母親自身のセルフケアについても支援した。</p> <p>③1歳児を育てる母親の育児力尺度の開発</p>	

#### <実施>

H24年の実態調査を基に71項目の育児力尺度を作成した。

④小児夜間救急電話相談実態調査 <日南・串間地区>  
(病気の子どもを持つ母親の育児力の実態を明らかにする)

#### <実施>

県立日南病院の夜間救急にかかるくる小児の電話内容について、看護部の許可を得て情報収集をおこなった。しかし、電話相談の記録では小児を限定できなかったため、小児の電話であることが確認できる調査用紙(案)を作成し、病院と検討している。

#### <評価・改善点>

未就学児の親子を対象とした教室を月に2回開催し、母親の育児力向上と学生の教育の場となっている。参加している親子の中には、子どもの発達に悩みをもつ親子もあり、教室で行う活動を通してお互いの子の成長発達の共有、専門家の助言、母親同士のつながりを深めることになっている。26年度は、育児力向上への支援として、作成した1歳児を育てる母親の育児力を測定するスケールを活用し支援していく予定である。

また、子育て支援を行っている支援者からの要請があり、食育に関する調理実習や講話・支援者の相談も行った。今後は、ニーズに合わせて講話や支援者の相談を行っていく予定である。

更に、母親の育児力向上への取り組みとして26年度から妊婦を対象とした母親教室を開催していく。

小児夜間救急電話相談の実態調査については、小児が明確にわかる調査票が完成後、取り組みを開始する。

#### <来年度の計画>

##### 1)子育て教室の開催

- ・子育て相談（面接・24時間メール相談）
- ・児の発達発育評価・相談（身長・体重測定等）
- ・ママの広場（母親交流・リラックスタイム・おやつ作り等）
- ・遊びの広場（母と子のふれあい・読み聞かせ等）
- ・学生による健康教育

##### 2)個別カウンセリング

##### 3)小児夜間救急電話相談実態調査

##### 4)母親学級の開催

- ・妊娠期からのからだづくり、こころづくり
- ・赤ちゃんのいる生活のイメージづくり
- ・個別相談

記載責任者	壹岐 さより
-------	--------

事業名	宮崎における子育て支援事業
対象	宮崎県内の子育て中の子どもとその保護者
事業組織	宮崎県立看護大学の教員（家族看護学Ⅰを担当する教員を中心として） 片野坂 千鶴子 代表（NPO法人みやざき子ども文化センター） 甲斐 鈴恵 代表（民間団体：グッドトイみやざき）
事業計画	<p><b>目的：</b> 子育てに不安を感じることなく、楽しく子育てができるよう、場（おもちゃ広場）を提供し、助言・支援を行い、そこに携わる専門職者（看護職者・保育士・おもちゃコンサルタントなど）相互の連携を深める。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学内および県内各地において、大学所有のおもちゃを使って「おもちゃ広場」を開催し、子育て支援活動を行う。</li> <li>2. NPO法人みやざき子ども文化センター江平イベントホールにおいて、常設のおもちゃ広場を開催し、月2回（第2・4火曜日）は大学の教員による子育て相談、年3回は講師を招き子育て講座を行う。</li> <li>3. みやざき子ども文化センターが中心に行っている子育てネット（民間団体の情報交換の場）に参加し定期的に子育て支援検討会を行い、行政や民間団体が行っている子育て支援の実際を情報収集し、今求められている宮崎県内における子育て支援のあり方を考える。</li> </ol>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学では1年に2回、計5日間のおもちゃ広場を開設し、子ども124名、大人236名の参加があった。「移動おもちゃ広場」は、宮崎市内、日向など要請があった地域におもちゃを持参して出向き、今年度は3回実施し、30名～225名の参加があった。このような活動を通して、子どもがおもちゃで夢中で遊ぶ姿から「このような機会をもっとつくってほしい」「どんなおもちゃを与えてよいかわかった」などの意見や、「脱水の予防について」などの子育て相談もあり、おもちゃ広場が子育て支援や、母親相互の情報交換の場となり、楽しい雰囲気の中で子育て支援ができ、好評であった。</li> <li>2. きよたけ児童文化センターにおいて、常設のおもちゃ広場を開催し、週2回（火・金）は大学の教員による子育て相談を行った。登録者が140名であり、毎回4～8組の親子の参加、親子で遊びながら子育ての相談もあり、支援を行った。</li> <li>3. みやざき子ども文化センターが中心に行っている子育てネット（民間団体の情報交換の場）に参加し、定期的に子育て支援検討会を行い、行政や民間団体が行っている子育て支援の実際を情報収集した。また、宮崎市が行っている子育て座談会に参加。7つの団体が一堂に会し、子育てに関する要望を市へ提言している。今求められている宮崎県内における子育て支援のあり方を考えるため、「未来みやざき応援フェスティバル2013」に企画から参加し、実行委員会からの要請で11月16日、17日はおもちゃ広場を開催し、約4,000名を超える親子が来場し、おもちゃ遊びを楽しんだ。</li> </ol>	

4. 他団体との連携を通して、子育て中の保護者の困りごとを把握し、今回、育児関係者の関心の高い話題としてアレルギーに関する講演会も行った。保護者や保育園関係者など、定員 50 名を超える申し込みがあった。

#### ＜評価・改善点＞

宮崎県内の各地域で「おもちゃ広場」を開催したが、参加者から「育児をしている保護者的心の支えになるので、もっと多くの人に知らせたい」「今度はいつか」などの意見が聞かれ、地域住民からのニーズが高いことが伺えた。より多くの方々が開催日時・場所の情報を得やすいように、広報活動として、大学ホームページの活用やチラシ配布場所の拡大、新聞の掲載などを行った。また、県内各地の方々が参加しやすくなるよう、「移動おもちゃ広場」の開催地域についても検討を重ねる。また、学童期への支援の声もあるため、対象を学童期にも広げ、より幅広い子育て支援を行う。

活動内容のニーズが高く、今後も継続して行うために、実施する支援者のマンパワーの育成の必要性が望まれる。

#### ＜来年度の計画＞

1. 大学内、および県内各地において「おもちゃ広場」を開催し、子育て支援活動（乳幼児・学童）を行う。
2. きよたけ児童文化センターにおいて、常設のおもちゃ広場を開催し、週 1~2 回（火・金）は大学の教員による子育て相談、および外来講師を招き子育て講座を行う。
3. みやざき子ども文化センターが中心に行っている子育てネット（民間団体の情報交換の場）に参加し、行政や民間団体と連携しながら、今求められている宮崎県内における子育て支援を実施する。

記載責任者	甲斐 鈴恵
-------	-------

事業名	思春期のヘルスケア開発事業－月経のヘルスケアプログラムの開発と実践－
対象	思春期女性とその保護者、養護教諭等の学校関係者
事業組織	長鶴 美佐子、壹岐 さより、長友 舞、蚊口 理恵、福永 美紀（宮崎県立看護大学） 長津 恵、田丸 喜代子（元宮崎県立看護大学助手） 学校関係者（主に養護教諭）との連携を図りながら実施
事業計画	<p><b>目的：</b>      本事業は「月経のヘルスケアプログラム」を通して、宮崎県下の思春期女性の健康に貢献することをめざすものである。      本事業では、生活調整支援を中心とした思春期女性への月経のヘルスケアプログラムを開発し実践する。さらに本ヘルスケアプログラムを広く継続的に提供するためのマンパワーづくりとして、本学学生を中心とした月経のヘルスケア peer supporter 育成を行う。</p> <p><b>実施内容：</b>      ①月経ヘルスケアプログラムの実践と検証      　・小・中・高校生への実践＜継続＞：公開講座や出前講座の実践      　・大学生への実践と peer supporter 育成 ＜継続＞      　・効果の検証：月経ヘルスケアプログラムの効果の検証を目的とした研究の継続      ②学校への広報と連携＜継続＞：公開講座や出前講義、講演などを通して広報に努めるとともに、学校関係者（主に養護教諭）との連携を図り活動基盤を固めていく。      ③3年間の活動報告書作成</p>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <p>本年度は公開講座を夏2回・春2回と出前講座2カ所（3回）を実施、また大学生へは3回継続して実施した。また本学学生に公募を行い公開講座での実践を通してピアサポーター育成を図った。</p> <p>3カ年の実績は、出前講座14カ所、公開講座17回であり、参加者は延べ1,386名（3月実施予定分を除く）である。また月経ヘルスケアプログラムの効果について研究を行い、看護研究・研修センタ一年報に報告した。現在も研究を継続中である。</p> <p>この3カ年の取り組みにより、今後の初経教育などをはじめとする月経教育への取り組みの基盤を固めることができた。本年度は3カ年の事業への取り組みを報告書（冊子）にまとめ、関係者や関係機関に配付予定である。</p>	
<p><b>&lt;評価・改善点&gt;</b></p> <p>3カ年の間に、月経ヘルスケアプログラムをつくり、公開講座や出前講座で実践を重ねながら改善を図り、学校版月経ヘルスケアプログラム事業へと発展させることができた。</p> <p>本事業の目的に掲げた、「月経のヘルスケアプログラム」を通して宮崎県下の思春期女性の健康への貢献することについては、一定の成果を上げたと考える。</p>	
<p><b>&lt;来年度の計画&gt;</b></p> <p>3月で本事業は終了</p>	
記載責任者	長鶴 美佐子

事業名	老いも若きも “はつらつ赤江” つながり隊
対 象	赤江地区住民
事業組織	川原 瑞代、小野 美奈子
事業計画	<p><b>目的 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①本学学生や教員が赤江地域のまちづくりに参加し、大学の人的・物的資源を活かし地域との協働を図る。</li> <li>②高齢者が、自分の体の状態に気付くことができる機会や健康学習に参加できる機会を設け、健康的な生活について考え実践できるようにする。</li> <li>③高齢者同士や異世代間交流を通して、相互に刺激し合い、いきいきとした楽しみのある日常へつながる機会を増やす。</li> <li>④学生が地域のまちづくり活動に参加し、看護の学びを発展する。</li> </ul> <p><b>実施内容 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①教員の赤江地域まちづくり推進委員会への参加(健康・福祉部会に所属)</li> <li>②教員・学生有志・住民との話し合いで住民ニーズに合った事業の企画</li> <li>③夏期休暇や講義の空き時間、休日等を利用し②の事業の実施</li> <li>④継続した活動につながるよう評価、次年度の検討</li> </ul>

#### <実施状況及び結果>

計画①：教員 2 名（小野美奈子、川原瑞代）が、赤江地域まちづくり推進委員会健康・福祉部会に所属した。委員会へ出席し、情報交換等を行った。

計画②：“イキイキ健康茶屋”は「身近な場所、利用しやすい時間帯での健康教室の実施や日ごろの健康チェックの機会、高齢者同士や異世代との交流」として、リピーターも増えるなど地域住民に周知され、赤江地域まちづくり推進委員会でも定例事業として推進している。本年も高齢者の介護予防事業等に実績・関心のある教員、学生らの協働で“イキイキ健康茶屋”を企画した。

計画③：平成 25 年 9 月 11 日（水）の午前・午後に “イキイキ健康茶屋” を実施した。内容は、健康チェック（血圧・身長・体重・体組成・握力・長座位立ち上がり・開眼片足立ち・骨密度）、学生によるミニ健康講座、医師による健康相談、地域包括支援センターによる生活機能評価、健康講話（運動の講義と実技）（担当：串間敦郎）等であり 47 名の住民参加があった。

（スタッフ 教員：串間敦郎、米良伊代、吉田幸代、福永美紀、小野美奈子、川原瑞代  
学生 7 名）

計画④：参加者アンケート（41 名回答）によると、講座後の感想は、「非常に満足」（78.0%）、「まあまあ満足」（17.1%）であり、参加者にとって満足できる内容であったと評価した。ためになった内容（複数回答）は、「学生によるミニ健康講座」（87.8%）、「体力測定」（85.4%）、「講義と実技」（75.6%）であり、短時間ではあったが学生の健康教育が好評であった。また、「毎日続けられる

よう頑張る」などの意識変化や「昨年は左足片足立ちが数秒だったので、ウォーキング途中、信号のたびに立って練習した結果が出てうれしかった」など、この機会を日常生活の中で活かした成果が見られた方もいた。体の状態への気付きや健康的な生活について考え実践できるような機会の提供ができたと評価した。「いつも主人と二人なので若い看護学生と話ができるうれしかった」など学生がスタッフとして参加したことに好意的な意見が多く、世代間交流も図られた。

#### ＜評価・改善点＞

高齢者が、自分の体の状態に気付くことができる機会や健康学習に参加できる機会として、継続していく。高齢者同士や学生の参加による異世代間交流は、相互により刺激となるので、学生の参加も積極的に図っていく。今後も赤江地域まちづくり推進委員会への参加を通し、地域住民のニーズを把握しながら、事業を展開していく。

#### ＜来年度の計画＞

- ①赤江地域まちづくり推進委員会（健康・福祉部会）に所属し、地域のニーズ把握や情報交換を行う。
- ②③赤江地域まちづくり推進委員会からも継続事業として要望があり、引き続き内容の充実を図りながら協働して“イキイキ健康茶屋”を開催する。（9月中旬実施予定）

記載責任者	川原 瑞代
-------	-------

事業名	高齢者のための介護予防運動活動の支援
対象	介護予防運動教室の指導者と宮崎市内的一般高齢者
事業組織	大名門 裕子、串間 敦郎、中村 千穂子、高尾 千賀子、川越 竜一、原村 幸代（宮崎県立看護大学） 宮崎市長寿支援課
事業計画	目的：高齢者のための介護予防運動活動の支援 実施内容： 宮崎市健康運動教室の指導員のフォローアップを行い、「宮崎いきいき健幸体操」を一般市民と事業所への普及を推進した。
<実施状況及び結果>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・23年度に完成させた「宮崎いきいき健幸体操」の各プログラムにおいて、個人が視聴しながら継続的に実施できる実践DVDを作成し、各実施団体へ配付した。</li> <li>・宮崎ケーブルテレビと共同で、体操啓発と市民の身体機能の維持向上のために市民向けの実践番組を作成し、毎日定期的に放送した。</li> <li>・施設や事業所職員等の専門職向けの「宮崎健康体操」の専門研修会を実施し、40名の参加があった。</li> <li>・運動教室指導員への体操実施方法のフォローアップ講習会を行った。</li> <li>・一般市民を対象とした一般研修会を9回実施し、45名の参加があった。</li> </ul>
<評価・改善点>	昨年度と同様の事業を今年度も継続的に実施した。今年は専門研修会において、昨年度意見の多かった低体力者向けの運動について、転倒予防においては低体力者でも実施できるよう方法に工夫を加えて高体力者と同じ部位を鍛える運動のパンフを作成し、説明・指導を行ったところ好評であった。今後も宮崎市の担当者と連携をとり、各方面への支援をしていきたい。
<来年度の計画>	今年度と同様に、一般市民向けと専門職向けの研修会を改善しながら充実させていきたい。
記載責任者	串間 敦郎

1-2)-①

事業名	看護職者のための看護力再開発講習会（技術演習コース）
対象	未就業の看護職者
事業組織	宮崎県立看護大学 宮崎県看護協会ナースセンター 共同開催
事業計画	<p><b>目的 :</b> 再就業を希望する未就業看護職者に対して、自己の潜在能力を高められるよう看護技術講習会を企画・実施し、再就業を支援する。本事業は、宮崎県看護協会との協働企画である。看護職能団体との連携の強化を図ることで、県内の看護の質の向上に貢献する。</p> <p><b>実施内容 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 看護力再開発講習会（技術演習コース）の開催           <ul style="list-style-type: none"> <li>・午前中は、講義および演習形式で行い、午後よりモジュール方式による看護方法実習書やビデオ教材等を使用して自主学習を行う。<u>プログラム内容は別添資料に示す。</u></li> </ul> </li> <li>2) 講習会プログラムの検討           <ul style="list-style-type: none"> <li>・講習時の受講者の反応や感想等についてアンケートを実施しプログラム内容の検討を行う。</li> </ul> </li> <li>3) 再就業の支援           <ul style="list-style-type: none"> <li>・受講者の経験・離職年数等を把握し、希望する就職先とのマッチングを行う。</li> <li>・講習会終了3ヵ月及び6ヵ月後に、就業状況調査を行う。</li> </ul> </li> <li>4) 報告書作成</li> </ul>
<b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b>	
<p>「看護力再開発講習会-技術演習コース」を、5日間集中型で開催した。前年度と同様、単元別選択制にして、受講者の方が再就業を目指そうとする領域に必要な演習項目が選択できるように取組んだ。定員30名に対し、受講希望者は実人員35名であった。講義コースに引き続き受講した研修生は18名であった。技術演習の全単元を受講した研修生は18名（5割）であった。受講終了後の演習についての理解度、目標達成、満足度に関する調査において、どの単元においてもわかりやすかった、実践に役立つ内容だった、等肯定的評価であり、満足度が高いことがわかった。また、受講3ヶ月後の就業状況調査では、再就業希望者34名中、21名が再就業しており、約6割の達成率であった。前年度に引き続き、講義コース、本コースの開催の後に、これらのコースで得た専門知識や技術をより深めるために、実習講習という実地訓練の場も開催している。前年度と同様、技術演習コース受講後間もなく実習を組みいれているため、実践に結びつきやすかったと好評であった。</p> <p>未就業の理由は、以前として就業時間等の就業希望条件と応募条件の不一致や家庭の事情などであった。中には、積極的に就業活動をしていても応募条件と自己の看護実践能力の差から就業に至っていないケースもある。今後も、宮崎県ナースセンターが窓口となって、就業相談及び情報提供等を引き続き行い受講者への支援活動を実施していく。</p> <p>平成25年度看護力再開発事業報告書を作成した。</p>	
<b>&lt;評価・改善点&gt;</b>	
<p>以上の事業結果より、再就業を希望しながらも不安を抱えて就業に踏み切れない看護職者の就業支援として本事業を継続して行なうことは意義がある。単元毎の選択制導入は、受講生にとっては自由度があり講評のため引き続き実施する。</p>	
<b>&lt;来年度の計画&gt;</b>	
<p>看護力再開発講習会-技術演習コースを継続して実施する。実施方法は5日間集中コース（単元別選択制）とする。</p> <p>新規単元として、誤嚥性肺炎の予防を目的とした「口腔ケアと吸引」をプログラムの中に組み込む。</p>	
記載責任者	栗原 保子

## 平成 25 年度 看護力再開発講習会 一技術演習コース

【宮崎県立看護大学・宮崎県看護協会協働事業】

日時/会場		9時 ~ 12時	13時 ~ 15時30分
9月9日 (月) 宮崎県立 看護大学 臨床実習室I 定員 30名	ガイダンス	<b>検査と看護（採血）</b> 診断・治療過程における検査の意義と看護の役割を再認識する。本単元では、「採血」技術を修得する。 学外講師；宮崎県立病院 中原由美子氏 学内支援者 4名	休憩  <b>自主学習</b> モジュール実習書、ビデオ教材、モデル人形等を用いて各自の目的に応じて演習を行う。学内支援者 4名
9月10日 (火) 宮崎県立 看護大学 臨床実習室I 定員 30名		<b>与薬と看護（注射）</b> 治療に伴う看護技術のうち、身体に直接影響を及ぼす与薬について理解を深める。本単元では、「注射」技術を修得する。 学外講師；古賀総合病院主任看護師 中角吉伸氏 学内支援者 3名	休憩  <b>自主学習</b> モジュール実習書、ビデオ教材、モデル人形等を用いて各自の目的に応じて演習を行う。学内支援者 4名
9月11日 (水) 宮崎県立 看護大学 臨床実習室I 定員 30名		<b>感染予防策の実際（感染防御）</b> 感染の知識を深め、正しい感染予防の実際を学ぶ。本単元では、「手洗い」等、感染予防に必要な基本技術を修得する。 学外講師；宮崎市郡医師会病院 感染管理認定看護師 篠原真理子氏 学内支援者 3名	休憩  <b>情報技術演習</b> 看護における情報システム化の過程を知る。演習として、文書作成にチャレンジし、パソコンの操作技術を修得する。尚、その他のソフト活用については、受講生のニードに適宜対応し演習を行う。 宮崎県立看護大学 毛利千祥 氏 学内支援者 2名
9月12日 (木) 宮崎県立 看護大学 臨床実習室I 定員 30名		<b>急変時の看護</b> (急変時のフィジカルアセスメント・救急蘇生) 身体機能面から見た急変時フィジカルアセスメントのとらえ方としてエビデンスに基づいた呼吸器・循環器の理解と対処の仕方を学び、最新のガイドラインに基づく心肺蘇生の基本技術を修得する。 学外講師；宮崎市郡医師会病院 救急看護認定看護師 鵜野和代氏 学内支援者 4名	休憩  <b>自主学習</b> モジュール実習書、ビデオ教材、モデル人形等を用いて各自の目的に応じて演習を行う。 学内支援者 4名
9月13日 (金) 宮崎県立 看護大学 臨床実習室I 定員 30名		<b>移動の動作の援助</b> 看護の対象者、看護者双方の安全、安楽を守るために必要なボディメカニクスを確認し、移動動作の援助を中心とした基本技術を修得する。 宮崎県立看護大学 坂井謙次氏 学内支援者 3名	休憩  <b>自主学習</b> モジュール実習書、ビデオ教材、モデル人形等を用いて各自の目的に応じて演習を行う。 学内支援者 3名

註;ガイダンス担当 栗原 保子

ガイダンス内容;本講習会の意義と目的を説明し、「看護技術とは」について再考できるよう、教材を活用して講義を行う。また、講習会の指導体制、演習支援内容について説明する。

1-2)-②

事業名	地域連携システム構築のための基盤づくり事業
対象	県内看護職
事業組織	小野 美奈子、川原 瑞代、米良 伊代（宮崎県立看護大学） 県内地域連携室看護師、県内地域包括支援センター保健師
事業計画	<p><b>目的 :</b>            医療圏ごとの個別な地域連携室の活動に焦点を当て、地域連携を担う専門職が、地域特性に応じて、どのように地域連携を行っているのか、地域連携室の活動を可視化することにより、地域連携の必要性について相互理解を促進する資料とともに、地域連携が促進されるための要因について質的に明らかにする。また、医療機関退院後の高齢者の地域生活を支える上で重要な役割を果たす地域包括支援センター保健師の実践力向上とネットワーク化を図ることで地域連携の要として活動できるよう支援する。それにより、患者に切れ目ない看護ケアが提供できるための基盤を強化していくことを目的とする。</p> <p><b>実施内容 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①県内の訪問看護ステーション、地域連携室の看護師や地域包括支援センター保健師の先駆的な活動をインタビューしてまとめ、事例集を作成する。</li> <li>②県内地域包括支援センター保健師の力量向上のための活動支援を行う。</li> </ul>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <p>①について病院、診療所の地域連携室の活動は、平成 22 年度に行った「宮崎県における退院調整と地域連携の実態調査」を元に地域連携室の活動を再度まとめなおした。また、西都児湯医療圏、西諸医療圏、宮崎東諸県医療圏の 3 医療圏の訪問看護ステーションの地域特性を踏まえた地域連携のあり方をインタビューし、事例集としてまとめた。</p> <p>②について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日南市の地域包括支援センターの保健師の学習支援を 2 回行い、地域包括支援センター保健師等延べ 10 名が参加した。</li> </ul>	
<p><b>&lt;評価・改善点&gt;</b></p> <p>①西都児湯医療圏、西諸医療圏、宮崎東諸県医療圏の 3 医療圏の訪問看護ステーションの地域特性を踏まえた地域連携のあり方について、事例集をまとめることができた。</p> <p>②研修会の開催ができ地域包括支援センター保健師へのネットワークや支援のきっかけづくりができた。今後は、保健師の力育成事業に地域包括支援センター保健師の参加を促し、関係機関同士のネットワークを広げていく。</p>	
<p><b>&lt;来年度の計画&gt;</b></p> <p>本事業でまとめたものを、今後研修等で活用し、地域連携を促進していく。今年度で、本事業は終了。</p>	
記載責任者	小野 美奈子

事業名	宮崎県内の医療機関に勤務する看護職者の看護実践能力向上のための実践・研究支援
対象	宮崎県内の医療機関に勤務する看護職者
事業組織	阿部 恵子、山岸 仁美、新田 なつ子、寺島 久美、小笠原 広実、沼口 文枝 川村 道子、山岡 深雪、毛利 聖子（宮崎県立看護大学） 宮崎県内の医療機関
事業計画	<p><b>目的：</b> 本事業の目的は、県内の医療機関に勤務する看護職者と教員とが共同・連携し、組織的な事例検討をとおした看護実践の成果を研究としてまとめ、広くその成果を普及させ、県内の臨床現場に還元して県内の看護職者の看護実践能力をめざすことである。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ナイチンゲール看護論に基づいて事例検討を共同で行なうことを施設に呼びかけ、共に事例検討会の計画を立案し、会に参加して事例検討を推進する。</li> <li>2) 各医療機関の事例検討運営担当（看護者）と教員とが会議をもち、実施した事例検討会を評価し、次回につなげて、事例検討会を継続開催する。</li> <li>3) 事例検討会の成果をふまえて、すぐれた実践について院内で共有する。</li> <li>4) 事例検討会の評価をふまえて、各組織において良い実践を選出し、それを研究的にまとめる取り組みを行う。</li> </ol>
<b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b>	
<p>事例検討会を開催した施設は7施設であった。それぞれ県立宮崎病院-6回、県立延岡病院-2回、県立日南病院-3回、善仁会・市民の森病院-5回、都城市郡医師会-1回、井上病院-2回、野崎病院-8回開催し、延べ1010名程度の看護職者が参加した。県立日南病院では、提出事例の検討をもとに、良い実践ができた事例を研究としてまとめ、日本看護学会（成人看護）で採択されたため、研究者1名の発表旅費・参加費を支援した。現在、次の事例の研究発表に向けて準備中である。善仁会・市民の森病院では、核となって事例検討会を進めるグループや、研究にまとめるグループを立ち上げて学会発表に向けて準備中であり、その過程を支援した。野崎病院では新規にナイチンゲール看護論による事例検討会を始め、少人数であるが継続的に事例検討会が開催できるようになり、現在研究発表に向けて取り組んでいる。</p>	
<b>&lt;評価・改善点&gt;</b>	
<p>以上の結果より、事例検討会を通して学んだ結果を病棟看護につなげることはできた。また、その中から1施設が研究としてまとめ、全国規模の学会で発表することができ、事例検討の成果を、研究としてまとめ発表するグループをつくり始めた施設が増えた。したがって、2年目として参加施設、回数、人数ともに増え、事例を提出した病棟は、看護が活性化したと反応があった。さらに、それらを研究としてまとめる取り組みにさしかかった施設が増えた。今後、実践知を研究としてまとめるプロセスを支援し、結果を病棟看護に還元できるような体制をつくりあげていくことが必要である。</p>	
<b>&lt;来年度の計画&gt;</b>	
<p>事例検討会を継続支援するとともに、リーダーとなる人材を育成し、各施設で展開できた良い看護実践を記述し、まとめて共有できるように社会化していくことを支援する。さらに研究として整え、学会発表のチャンスをもてるようそのプロセスを共に辿り、発表に際しては旅費等の支援を行う。</p>	
記載責任者	新田 なつ子

事業名	宮崎県内の急性期医療に携わる看護職者の看護実践力向上のための支援
対象	宮崎県内の急性期医療に携わる看護職者
事業組織	寺島 久美、沼口 文枝、邊木園 幸、山岡 深雪、井上 理恵子、谷口 敦子、黒木 瞳（宮崎県立看護大学） 河野 美恵子（宮崎県立延岡病院） 宮崎県内の急性期医療機関の看護職者
事業計画	<p><b>目的 :</b> 宮崎県内の急性期看護実践・教育に携わる看護職者が、ナイチンゲール看護論を基盤として急性期看護に係わる最新かつ高度な専門知識・技術を学び合い、具体的な事例検討をとおして看護問題解決のための方略を探って実践に生かし、かつそれらの成果を拡張させて県内の急性期医療を必要とする患者・家族の療養過程を支援し、宮崎県の急性期看護の質の向上に寄与する。</p> <p><b>実施内容 :</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 講師を招聘して急性期看護に係る研修会を開催（年2回予定）する。</li> <li>2) ナイチンゲール看護論に基づいた事例検討・学習会（年3回予定）を継続する。</li> <li>3) 全国で行なわれる急性期看護領域の研修会に参加して最新の情報を収集し、その成果を事例検討・学習会で報告し、実践に活用する。研修会や事例検討・学習会を通して、急性期看護に携わる看護職者の抱えている課題や必要な支援について把握する。</li> </ol>
<b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b>	
1) 7月に家族看護支援専門看護師（藤野崇氏）による看護セミナー（テーマ：急性期看護領域における家族看護）を実施した。開催にあたって、県内の急性期医療関連施設に急性期看護セミナーの開催と事例検討・学習会案内を送付し参加を呼びかけた。参加者は164名（学生47名含）であった。アンケート（回収率：69%）では、「家族の思いや現状を理解し一緒に共有していくことの大切さがわかった」「様々な状況の中で家族の動搖をいかにサポートできるか、サポート力で家族の発揮できる力が少しでも大きくなれば良いと思った」など、今後の看護実践につなげたいという感想が寄せられた。困っていることとして、緊急性が高く家族の動搖が大きい時期での家族看護の困難さが挙げられていた。	
11月に急性・重症患者看護専門看護師（北村愛子氏）の看護セミナー（テーマ：急性期看護領域における患者・家族援助-フィジカルアセスメントと終末期ケアに焦点を当てて-）を開催した。参加者は200名（学生109名含）であった。アンケート（回収率：84%）では、「フィジカルアセスメントと緩和ケアの繋がりの重要性を学べた」「ケアリングについて深く考えられた」「看護の専門性、すばらしさを実感した」「学生に勇気を与えてもらった」「アセスメント力を鍛えていきたい」などの回答があった。	
両セミナーとも県内各地から看護職者、学生の参加があり、研修内容には概ね満足が得られていた。	
2) ナイチンゲール看護論に基づいた事例検討・学習会を本学で3回（10, 11, 2月）実施した。延べ37名の看護職者が参加した。	
1回目：慢性閉塞性肺疾患の既往があり自然気胸により肺部分切除を受けた80代男性への手術直後の看護過程について検討を行った（参加者14名）。参加者は、看護者が術後合併症予防を重視するあまり、患者に不安を抱かせる関わりになりがちであることに気づき、患者の回復力に着目して、その力を患者とともに促進させていく関わりの重要性を共通認識した。患者の生きてきた時代背景と患者情報を重ねることで、患者の立場にたった関わりに繋がりやすくなることに気づいた参加者もいた。	

**2回目**：膿皮症で夜間救急外来を受診した30代女性について検討した（参加者12名）。対症療法のみ受けて「たらい回し」になりがちなケースであったが、短時間の関わりの中で、対象を全人的に捉えて生活支援につなげていくという救急の場における看護の専門性が求められるケースであることが全員で了解でき、看護の視点で対象を見つめる思考過程を鍛えることにつながった。関わりの場面から、今後の自分の実践への方向性が見いだせた参加者もいた。

**3回目**：有機リン中毒（自殺企図）でICUに入院した初老期の男性への関わりについて検討した（参加者11名）。積み重なる困難な状況の中で、多くの喪失体験をし、生活基盤と自己存在がゆらぎ、十分な回復過程を辿ることができずに自殺企図に至った患者の状況と、ともに苦しんできた家族の様子が想像され、患者・家族に生じている対立を緩和していくことが看護者に求められていることが明らかとなった。看護者の関わりは患者の行き詰った状態を緩和させ、家族との対立を緩和させる方向でのターニングポイントとなっていたことが確認できた。自殺率の高い宮崎県で、自殺予防として看護師の果たすべき役割を確認し、具体的な実践からそれぞれ学びや気づきを得ることができ、今後の看護実践に繋げたいと述べていた。

3)2013年度日本クリティカルケア看護学会教育セミナー（於東京都）に県内看護職者1名（恒吉さやこ氏：県立宮崎病院）が参加した。集中ケア認定看護師、麻酔科医、認定看護師教育課程専任教員による【急性期侵襲病態における生体反応－感染症と感染によらない全身性炎症反応のメカニズムを考える－】【急性呼吸障害の理解と管理】【急性循環障害の理解と管理】【クリティカルな状況にある患者の心理・社会的援助】【脳循環障害の理解と管理】についてのセミナーであった。セミナーで得られた知識と学びについて「第3回急性期看護事例検討・学習会」で報告を行った。セミナーで得られた知識が実践に繋がった事例を報告し、「セミナーへの参加を通して、日々の臨床で経験していることを細胞レベルでイメージでき、回復過程の根拠がより明確になった。実践につなげて考えることで納得でき、非常に意義深い学びが得られた」との感想が述べられた。

#### ＜評価・改善点＞

- 専門看護師による急性期看護セミナーは、昨年の課題から講演時間を1時間延長し3時間の講演とした。県内各地から看護職者の参加が得られた。アンケート結果より、参加者は概ね内容に満足し、日頃の実践と繋げて気づきが生まれており、看護の価値を再確認でき、新たな課題を見いだせた、今後の実践に繋げたい、という感想が多く、質の高い急性期看護への動機づけにつながったと思われる。今後は双方向性のあるセミナー方法について検討したい。
- 急性期看護事例検討・学習会は、参加者の反応から、看護理論を意識しながら時間をかけて1事例を全員で検討していくことでその事例に対する全人的かつプロセスとして対象を捉える視点が形成されていることが伺える。この取り組みをさらに継続し、実践現場で使える看護学的な視点の定着につなげていきたい。

#### ＜来年度の計画＞

目標：本事業の継続と成果の普及

- 平成24・25年度と同様に、講師を招聘して研修会を開催（年2回）すると共に事例検討・学習会（年3回）を継続する。また、急性期看護領域の研修会に参加して最新の情報を収集しその成果を報告・活用し、普及させる。
- 事例検討・学習会を通して得られた成果を研究としてまとめ、本事業の事例検討・学習会および急性期看護領域の学会で報告する。
- 3年間の成果を冊子にまとめ、関連する看護職者および医療施設に配布する。

記載責任者	寺島 久美
-------	-------

1-2)-⑤

事業名	看護研究支援・講師派遣事業
対象	県内看護職
事業組織	宮崎県立看護大学看護研究・研修センター
	<p>目的：</p> <p>地域における現任看護職者の看護（研究）の質の向上のために教員を派遣し研究を支援する。</p>
事業計画	<p>実施内容：</p> <p>1) 研究支援の要請があった場合は、教員の中から人選して派遣する 2) 研究支援に関する活動実績及び課題を年度末に把握する 3) 地域貢献等研究推進事業の2事業を通して研究支援を行っていく</p>
<p>＜実施状況及び結果＞</p> <p>県内施設に対するこれまでの研究支援の実績については、3月に行った地域貢献に関する教員の学外活動調査にて把握した平成25年度の学外調査によると13団体に対して、7名の教員による38回の研究支援実績があった。</p> <p>学会発表につながったものもあり、地域における現任看護職者の研究の質に貢献できていると評価できた。</p>	
<p>＜評価・改善点＞</p> <p>新規の研究支援依頼はなかった。研究支援実績は、昨年度より増加しており、現任看護職の研究の質の向上に貢献できていると評価できた。</p>	
<p>＜来年度の計画＞</p> <p>研究支援の要請があった場合は、教員の中から人選して派遣し、研究を支援する研究支援に関する活動実績を年度末に把握する。</p>	
記載責任者	小野 美奈子

1-2)-⑥

事業名	研修会講師派遣事業
対象	県内看護職
事業組織	宮崎県立看護大学看護研究・研修センター、宮崎県看護協会他
	目的： 看護協会などと協働して看護職者等を対象とした教育研究活動を支援するためには教員を派遣する。
事業計画	実施内容： 1) 講師派遣要請があった場合は、テーマにそって教員を選んで派遣する 2) 派遣実績を記録していく 3) 学外講義に関する活動実績を年度末に把握する
<実施状況及び結果>	
1) センターを通した新規の講師派遣の要請は、なかった。 2) 本学教員の研修会講師の実績については、3月に行った地域貢献に関する教員の学外活動調査にて把握した。 看護職者を対象とした研修講師派遣要請は年々多くなっており、平成25年度は延べ149人の教員が369時間の研修会講師を担当した。 また研修会等でファシリテーターや助言者など、延べ106名の教員が578時間講師以外の活動を行っていた。 これらの学外活動は年々増加してきており、現場からのニーズに対応できていると評価できた。	
<評価・改善点>	
講師派遣実績は年々増加して生きており地域のニーズに細やかに対応できていると評価できた。	
<来年度の計画>	
新規の依頼には派遣ルートにそって講師派遣の要請にこたえていく。	
記載責任者	小野 美奈子

事業名	<b>研修生受け入れと資質の高い看護職者育成・活動支援事業 保健師の力育成事業他</b>
対象	<b>県内施設、県内保健師</b>
事業組織	<b>宮崎県立看護大学看護研究・研修センター、宮崎県医療薬務課、宮崎県看護協会 保健師職能</b>
事業計画	<p><b>目的 :</b> 資質の高い看護職者が活躍する場が県内に広がることを目指した取り組みを行う。</p> <p><b>実施内容 :</b></p> <p>1) 大学での研修の希望がある時には希望する研修内容を吟味した上で宮崎県立看護大学研修員規程にそって積極的にうけいれる</p> <p>2) 卒業生からなる保健師のネットワークづくりを支援する</p> <p>3) 保健師現任教育研修マニュアル・プログラム開発の「保健師の力育成事業」をおこなう。</p> <p>①新任保健師研修Ⅰを高鍋保健所と共同で実施・評価する（9月～2月）</p> <p>②新任保健師研修Ⅱを実施・評価する（8月～2月）</p> <p>③中堅保健師研修Ⅰを実施・評価する（6月～2月）</p> <p>④中堅保健師研修Ⅱを実施・評価する（8月～2月）</p> <p>⑤リーダー保健師研修を実施・評価する（7月～3月）</p> <p>⑥①～⑤の評価を行い、宮崎県における保健師現任教育研修マニュアルを作成する</p>
<実施状況及び結果>	<p>1) 研修受け入れ希望はなかった。</p> <p>2) 宮崎県立看護大学看護学研究会第7回学術集会に合わせて保健師交流会を実施した。また、学術集会では保健師及び地域看護の領域で働いている卒業生を中心としたポスターセッションの分科会を持つことができた。</p> <p>3) 保健師の力育成事業として宮崎県立看護大学地域貢献等研究推進事業の予算を得て計画的に取り組むことができた。</p> <p>①新任保健師研修Ⅰ：22名の新任保健師に対し6回の研修を日向保健所と共同で企画・実施した。中核市保健所からの参加も見られ、新任保健師間のネットワークが広がった。</p> <p>②新任保健師研修Ⅱ：9名の対象者に対してアクションプランの企画・実践・評価を中心に研修会を4回企画・実施した。前年度の新任保健師研修会の学びを位置づけ、目的意識を持って参加しており到達度は高かった。</p> <p>③中堅保健師研修Ⅰ：11名の中堅保健師に対して7回の研修を企画・実施した。市町村保健師の参加も半数あり、市町村保健師と保健所保健師の交流の機会ともなった。意識的に取り組んだアクションプランを通して保健師活動の成果が見られた。</p> <p>④中堅保健師研修Ⅱ：3名の対象者に対してアクションプランの企画・実践・評価を中心に研修会を4回企画・実施した。中堅保健師との合同開催とした。昨年度とりくんだアクションプランを発展させた内容で、保健師としての成長が見られた。また、中堅保健師研修Ⅰとの合同開催であったため、中堅保健師研修Ⅰ受講生への役割モデルともなった。</p> <p>⑤リーダー保健師研修：リーダー保健師7名に対して5回の研修会を実施した。保健師活動</p>

を発展させる研究的取り組みの過程から潜在的地域のニーズの掘りおこしや保健師間のネットワークの強化、関係機関との連携の強化が図られるという効果も見られた。

⑥4回の現任教育マニュアル検討委員会を開催し、研修会の企画、評価を踏まえ宮崎県保健師現任教育マニュアルを作成し、県内保健師、関係機関に配布した。

⑦3年間の保健師の力育成事業の取り組みの成果の報告、宮崎県保健師現任教育マニュアルの活用方法の説明、平成26年度からの保健師現任教育推進に向けた共通理解を図るため、2月に県内保健所・市町村のリーダー保健師を対象に、宮崎県保健師現任教育推進研修会を1回開催した。18名の出席があった。

⑧保健師の力育成事業の評価については、日本公衆衛生看護学会第2回学術集会でワークショップを開催し報告した。また修了生2人が現任教育で取り組んだ実践や研究の発表を行った。

＜評価・改善点＞2)について：卒業生の保健師ネットワークが強化できた

3)について：3年間の保健師の力育成事業を行ったことにより、①宮崎県における段階別保健師研修体系の構築②各研修の標準プログラムの開発③宮崎県保健師現任教育マニュアル作成ができた。その過程で、保健師活動について語り合う機会が増え、後輩のアクションプランを指導することで先輩も育っていることを確認すると共に、保健所、市町村、県、保健師職能、看護大の連携が深まり、保健師として育ち合う風土ができつつある。これまで培った良さを活かしながらマニュアルに沿って平成26年度から3年間、現任教育をさらに推進し、保健所を中心とした現任教育が行われるような体制を整備していく。

＜来年度の計画＞

- ・研修希望があれば引き続き宮崎県立看護大学研修員規程にそって積極的にうけいれる
- ・宮崎県立看護大学看護学研究会第7回学術集会で保健師を対象とした分科会を持ち卒業生の保健師ネットワークを強化していく
- ・宮崎県保健師現任教育マニュアルに沿った現任教育の推進と、現任教育の中核として保健所が役割を果たせるように支援していく。

記載責任者	小野 美奈子
-------	--------

事業名	<b>学校版月経ヘルスケアプログラム作成事業 ～大学の研究成果を地域に還元～</b>
対象	<b>思春期女性</b>
事業組織	<p><b>長鶴 美佐子、壹岐 さより、長友 舞、蚊口 理恵、福永 美紀（宮崎県立看護大学） 長津 恵、田丸 喜代子（元宮崎県立看護大学）</b></p> <p><b>【高校養護教諭】</b> 牧野 啓子（延岡商業高校）、浦田 かおる（都城西高校）、西尾 美智子（宮崎南高校）、 谷口 節子（都農高校）、河口 えり（宮崎北高校）、米倉 藍（都城商業高校）</p> <p><b>【県教育委員会スポーツ振興課】</b> <b>内山 優子（指導主事）</b></p>
事業計画	<p><b>目的：</b> 県内の思春期女性が月経に対する理解を深め、月経と生活との関連、月経トラブル予防・改善のための工夫などを学ぶことを通して、自分自身に目を向け、自らの「からだ」と「こころ」を理解し「自分を大切にする姿勢や行動を養う」ことができるよう支援するため、県立看護大学が開発した「月経ヘルスケアプログラム」を学校現場で使用できるよう編集し、活用を図る。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li><b>1. 作成委員会の設置：</b>本学教員と養護教員による作成委員会を設置し、6月に第一回会議を開催。本事業の概要説明、今後の進め方と役割確認等を行った。</li> <li><b>2. 視聴覚教材、テキスト等の試案作成：</b>8月の第二回会議において、全体の構成と作成予定の視聴覚教材等について意見交換後、約3ヶ月かけて試作品を作成した。</li> <li><b>3. プレ実践：</b>12月に、養護教諭（作成委員）による試作品を用いたプレ実践を行った。</li> <li><b>4. 試作品の評価と修正：</b>プレ実践後、12月末の会議にて試作品の評価を行い、修正を加えたのち生活編を完成した。</li> </ol>
<p><b>&lt;評価・改善点&gt;</b></p> <p>作成にやや時間を要したが、ほぼ予定通りにプレ実践・評価・修正を行い、生活編の視聴覚教材（DVD）、指導者テキスト、パンフレットを完成することができた。作成委員からの要望を受けDVD版だけでなく、パワーポイント版も配付の対象にした。これにより各学校の個別性や教育の状況に対応しやすい教材となった。本年度は、各地区の養護教諭部会の協力があり、本事業を紹介とともに学校側のニーズなどを幅広く聴取することができた。この結果は、次回の理論編づくりに活かしていく。</p>	
<p><b>&lt;来年度の計画&gt;</b></p> <p>昨年度同様のスケジュールで、本年度は「理論編」の視聴覚教材（DVD、パワーポイント教材）、指導者テキスト、パンフレットを作成する。「理論編」完成後は、本年度作成した「生活編」と合体し一本化して、3月には視聴覚教材、指導者テキスト、パンフレットを完成する。</p>	
記載責任者	長鶴 美佐子

事業名	児童養護施設における生きる力「性＝生」教育開発支援事業
対象	児童養護施設に入所している児童とその支援者
事業組織	<p>児童養護施設における生きる力「性＝生教育」を考える研究会          松本 憲子、小野 美奈子、壹岐 さより、長友 舞（宮崎県立看護大学）          河野 義貴（県立宮崎病院）、松尾 祐子（中央福祉こどもセンター）          工藤 裕子、東原 擁慈（北部福祉こどもセンター）          安田 真里、村岡 涼子、飛鳥井 祐二（南部福祉こどもセンター）          松尾 政信、日高 昌弘（県立みやざき学園）寺原 美保子（こども療育センター）          大澤津 雄作、山腰 美穂子（教育研修センター）          児童養護施設職員（県内 9 施設）藤田 美和（一般社団法人宮崎県助産師会）          加藤 陽子（秦産婦人科）、坂本 三智代（医療薬務課）</p>
事業計画	<p><b>目的：</b>          児童養護施設で生活する児童の多くは、虐待を受け続けたことに起因する反応性愛着障害やその特性がゆえに、虐待を受けやすい広汎性発達障害等が見られ、集団生活を送る上での課題も多く、様々な場面で個別的なかかわり（支援）を必要としている。          特に、性にまつわる様々な問題も少なからず発生しており、児童養護施設等の職員はその対応に苦慮しており、これら対応の在り方が喫緊の課題となっている。          そのため、児童養護施設職員をはじめ、医療・保健・福祉関係者等が、『児童養護施設における生きる力「性＝生教育」を考える研究会』を設置し、児童養護施設の入所児童に対して生きる力「性（＝生）」教育（指導）を行うためのネットワーク構築や、児童一人ひとりが正しい性（＝生）の価値観を持ち、性犯罪や望まぬ妊娠、若年出産による虐待の連鎖を防ぐための方策について検討を行う。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究会の開催（1回/月）</li> <li>2. 性教育研修会の開催</li> <li>3. 児童養護施設の実態調査</li> <li>4. 研修会参加</li> </ol>
<b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b>	
1. 関係者の勉強会（月1回）メンバー35名	年間11回の勉強会を行った。勉強会では、研修会開催に向けて、児童相談所の要望を集約し、セミナーの企画に活かすことができた。 また、性教育プログラム開発に受けて、児童養護施設の実態調査の調査項目の検討を行い、実態調査を行うことができた。
2. 研修会	2013宮崎セミナー開催（9/11, 12）場所；県立看護大学講師6名（東京、大阪、岐阜）セミナー参加者は、2日間で延べ240名であった。セミナー後のアンケートでは、児童養護施設、児童福祉行政、保健行政、学校関係のさまざまな所属からの参加があったことがわかった。また、職種についても、指導員、保育士、心理職員、ケースワーカー、保健師、養護教諭の参加があった。研修会の内容についての感想では、9割弱の参加者が「大変良かった」と回答し、この研修会を他の人に勧めたいかの質問では、参加者全員が「はい」と答えており、満足度の高い有意義な研修会を開催することができた。
3. 児童養護施設入所児童の性行動等の現状把握	施設長及び職員に対するアンケート調査を実施することで、児童養護施設の「施設運営」、「施設入所児の日常生活と支援」、「性に関する問題と性教育」の現状と課題を明らかにすることができた。
4. 研修会参加	・性の健康カウンセラー養成講座 東京都（2回）
<b>&lt;来年度の計画&gt;</b>	
1. 研究会の開催（1回/月）	
2. 性教育研修会の開催	
3. 1)宮崎セミナーの開催（2回目；基礎編、実践編） 2)教育プログラム作成研修会の開催	
4. 性教育実践（モデル施設：カリタスの園 竹の寮）	
5. 支援体制整備	
5. 研修会参加	
記載責任者	松本 憲子

1-4)-①

事業名	県内の助産師のネットワーク作りとキャリアアップをはかる事業
対象	県内で就業している助産師
事業組織	菅沼 ひろ子、橋口 奈穂美（宮崎県立看護大学） 上原 えり子、森 伴子、田中 優子、水畠 喜代子（一般社団法人宮崎県助産師会）
事業計画	<p><b>目的：</b>          県内の助産師活動の連携や相互の浸透を図る助産師のネットワーク作りと、助産師活動をさらに活性化することを目的として研修会・研究会を開催する。宮崎県助産師会と合同で企画運営し、県内助産師の助産活動の質の向上に貢献する。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <p>第1回：4月14日(日)13:00~16:00          周産期における医療安全について              宮崎大学基礎看護学 教授 甲斐由紀子</p> <p>第2回：7月20日(土)13:00~16:00          妊娠分娩産褥ケアについての事例検討会</p> <p>第3回：9月8日(日)13:00~16:00          妊婦のマイナートラブルや乳房トラブル時の対応について              めぐみ助産院 岩田塔子</p> <p>第4回：10月26日(土)13:00~16:00          子ども虐待防止について              福岡市こども総合相談センター所長 藤林武史</p> <p>第5回：1月11日(土)13:00~16:00          分娩台でできるアクティブバース              ほのか助産院 安藤直美 みまた助産新 西畠久美子</p> <p>第6回：3月8日(土)13:00~16:00          母乳育児を目指して              宮崎県立看護大学 菅沼ひろ子              やまさき母乳育児相談室 山崎美穂              日高母乳育児コンサルタント 森伴子              古賀総合病院 田中優子</p>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <p>第1回「周産期における医療安全について」26名参加、第2回「妊娠分娩産褥ケアについての事例検討会」参加者32名、第3回「妊娠分娩産褥ケアについての事例検討会」参加者73名、第4回「子ども虐待防止について」参加者47名、第5回「分娩台でできるアクティブバース」参加者39名、第6回「母乳育児を目指して」参加者47名。毎回のアンケート回収率81~100%。アンケートでは、毎回8割以上が役に立つ研修会と答えている。具体的には、新しい知識やワザを知れたこと、実践の再確認につながっていること、他職種や他施設との情報交換ができ自施設に役立てたいとい</p>	

う意見や、より良い母子ケアに向けての連携や自己研鑽の必要性が示されており、概ね研修内容に満足していることや助産師同志の繋がりできつつあることが確認できた。

**<評価・改善点>**

助産師同志の連携をさらに意識していけるようなグループディスカッションとなることが今後の課題。また、助産の技に対しては参加者が多いが、事例検討会は参加者が少ない。広報等参加の呼びかけを文章だけにとどまらず、助産師間（人対人）での呼びかけも行っていく。

**<来年度の計画>**

本事業は継続する。内容は、周産期の医療安全と助産の技については引き続き研修会を設ける。実践のリフレクションとなるよう事例検討を含む研修会を設ける。

記載責任者	橋口 奈穂美
-------	--------



## 2. コンソーシアム専門部会



事業名	コンソーシアム宮崎への支援
対象	高等教育コンソーシアム宮崎加盟機関の教職員、在学生、県内の中・高校生等
事業組織	コンソーシアム専門部会
事業計画	<p>目的：コンソーシアム宮崎の各事業への支援をはかり、なおかつ本学の広報活動等に活用していく。</p> <p>実施内容：活動の活性化を図るため、各部会に担当者を配置し、活動状況を共有した全学的協力体制づくりを行う。</p>

### <実施状況及び結果>

平成 25 年度は 24 年度同様、教育・研究連携、学生交流、地域連携の 3 つの事業実施部会で、次の事業を実施した。括弧内は担当者。

- ・ 教育研究連携 – FD 事業（橋口）、単位互換（コーディネート科目事業）（川北、工藤）
- ・ 学生交流 – 学生インターナショナル事業（橋口）、インターンシップ事業（大藤）、就職活動事業（古場）
- ・ 地域連携 – 合同進学説明会事業（工藤）、公募型卒業研究テーマ事業（橋口）、県との連携強化（平成 25 度は各大学選出せず）

また、事業を機動的に進めていくために、昨年同様、企画会議での事業企画や運営について協議が行われ。実施部会長主導で事業が進められていった。本学が今年度関連した各事業について以下にまとめた。

#### ・ FD

「平成 25 年度高等教育コンソーシアム宮崎剛堂研修会」と題した、FD 研修会が、宮崎公立大学にて、3 月 1 日に開催された。参加校は、宮崎大、公立大、看護大、南九大、産経大、国際大、南九短大、学園短大、都城高専であった。各大学の報告と事例発表が行われ、活発な討議が行われた。

#### ・ コーディネート科目

今年も宮崎公立大学を会場に 10 月 5 日から 11 月 16 日まで「宮崎の郷土と文化」のテーマで実施され、77 名の受講者があった。本学からの履修はいなかった。15 回の授業のうち 1 回の授業については、本学より講師として大館准教授が講義を行った。また、平成 25 年度は本学がコーディネート科目の事務担当校をつとめた。

・単位互換

本学からは、「宇宙地球科学」（小河准教授）、「宮崎の文化」（大館准教授）の2科目を提供したが、受講生はいなかった。また本学の学生で、他大学の単位互換科目を履修した学生は今年もいなかった。

・合同進学説明会

授業体験会を12月7日(土)に、宮崎公立大学で延べ831名を集め実施された。まず、参加者全員へのガイダンスが行われ、その後、各会員校の模擬授業を実施（10校延べ24講義）。本学からは、川原准教授が講義を行い、2コマ併せて約70名が受講した。

＜評価・改善点＞

本学は、コンソーシアム事業に対して協力可能な事業に関しては、積極的に協力しているといえる。また、平成25年度はコーディネート科目の事務当番校としても協力も行った。

全体として、平成25年度においても企画会議を中心に、迅速に事業が進められていった。ただし、単位互換に関しては、本学学生の参加は無く、これまでの全体の参加者数も少ない。今後の事業の見直しが必要となろう。

＜来年度の計画＞

平成26年度においても、コンソーシアムみやざきの柱となる地域連携の3つの連携事業（教育・研究連携、学生交流、地域連携）に協力をしていく。

記載責任者

大館 真晴

### **3. その他センターに関する重要事項**



3-1)-①

事業名	認定看護師教育課程（感染管理）開設準備事業
対象	県内看護職
事業組織	宮崎県立看護大学看護研究・研修センター
事業計画	<p><b>目的：</b> 感染管理に関する県内の医療機関の看護職の質の向上をはかり、県民の保健医療福祉の向上を目指し、認定看護師教育課程（感染管理）開設に向けた準備を行う</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①専任教員予定者（邊木園幸 講師）の専門性の向上を目指した山梨県立大学大学院看護学研究科専門看護師教育課程（感染看護）へ派遣</li> <li>②教育課程を編成し、講師を確保する</li> <li>③実習施設及び実習指導者を確保する</li> <li>④開設に向けた関係機関への周知を行う</li> <li>⑤教育環境整備を行う</li> <li>⑥申請書を作成し、8月に日本看護協会に認定看護師課程【感染管理】の開設を申請する</li> <li>⑦認定看護師課程開設のための広報及び受験者事前学習の場として感染管理スキルアップ研修会を開催する</li> </ul>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <p>①専任教員予定者（邊木園幸 講師）が山梨県立大学大学院看護学研究科専門看護師教育課程（感染看護）を3月に修了した。</p> <p>②～⑥平成25年度は、具体的な書類作成に向けて教育課程運営に関わる具体的な事項を原則2週間に1回の部会を開催し、検討していった。16回の準備部会を開催し8月に教育機関の認定申請を行い、平成25年10月21日付けで教育機関として認定された旨の公文書を受理した。準備の詳細は以下の通り。</p> <p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4/12&lt;第8回部会&gt; *規則、細則について、学年歴について、研修生の抗体価検査について検討した。</li> <li>・4/15&lt;第9回部会&gt; *規則、細則について、学年歴、非常講師、実習要項について検討した。</li> </ul> <p>5月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5/10&lt;第10回部会&gt; *規則、細則について、実習要項、研修生の抗体価検査、センター事務局認定専任非常勤職員の確保について検討した。</li> <li>・5/24&lt;第11回部会&gt; *規則、細則について、非常勤講師の確保、申請書類の作成、実習施設の確保、実習要項、教員会、入試委員会の委員構成について検討した。</li> </ul>	

6月

・6/7 <第12回部会>

\*申請に向けたタイムスケジュールの決定、申請書類の作成、教員会・入試委員会規程、募集要項について検討した。

・6/14 <第13回部会>

\*募集要項、実習要項、講師プロフィール表、申請書類の作成について検討した。

・6/21 <第14回部会>

\*募集要項、実習施設の確保、講師プロフィール表、申請書類の作成について検討した。

7月

・7/3 <第15回部会>

\*第一段階の提出書類を作成、確認・修正を行う。

・7/12 <第16回部会>

\*講義概要、シラバス検討、面接試験の方法について検討した。

・7/17 <第17回部会>

\*申請様式、講義概要、シラバス、実習要項、募集要項の確認、県への新規事業「認定看護師（感染管理）教育課程」申請書類の確認・修正について、センター事務局認定看護師教育課程専任非常勤職員が看護職で確保見込みとなった。

#7/19：仮申請の実施。5回のメール及び電話での指導を経て日本看護協会へ1回目の書類を提出了。

8月

・8/8 <第18回部会>

\*8/8に日本看護協会より電話にて1回目の指導を受け、修正のための会議を開催した。

[指摘事項]

シラバス、主任教員・専任教員、実習期間・実習指導方法、入学資格要件、収支、書籍・教育環境、認定看護師教育課程の円滑な運営のための方策等について検討した。

・8/13 <第19回部会>

\*指摘事項を修正し、2回目の書類提出了。

・8/16 <第20回部会>

\*8/16に日本看護協会より電話にて2回目の指導を受け、修正のための会議を開催した。

[指摘事項]

シラバス、主任教員実践経験の記載、非常勤教員の数、認定看護師教育課程運営連絡会の責任者等について。修正の上、「次回申請は本申請可」との許可をうける。

・8/20 <第21回部会>

\*指摘事項を元に修正箇所を確認し、21日決済、22日発送の予定を合意した。

#8/22：本申請の実施。日本看護協会への公文書で書類を提出了。

・8/30：日本看護協会より電話連絡。実習に関する時間の表記を修正するように指導を受け修正の上、当日送付した。

9月

・9/1：センター事務局認定専任非常勤職員が着任した。

- ・9/4<第22回部会>

\*今後のタイムスケジュール、広報活動、主任・専任教員予定者の三重県立看護大学への視察、図書リスト、教員会、入試委員会の実施、非常勤講師依頼・派遣依頼、実習施設依頼・実習受け入れ依頼について検討した。

・9/14～12/13：認定看護師教育課程準備のため、県内の安全な医療の実現のために、感染管理に関するより専門的な知識及び技術を修得し、チームリーダーとして自施設の医療関連感染の予防と管理に貢献できることを目的として感染管理スキルアップ研修会を開催した。

10月

- ・10/8～10/9：主任・専任教員予定者の三重県立看護大学認定看護師教育課程を視察した。
- ・10/15：日本看護協会より電話連絡。事前査読で委員より質問があった「研修生の希望に添った実習配置ができない場合の対応をどうするか」について回答し、送付した。

11月

#11/13：平成25年10月21日付けで教育機関として認定された旨の公文書受理した。

- ・11/15<第23回部会>

\*部会の総括、今後の認定看護師教育課程の運営（教員会、入試委員会、認定看護師教育課程運営連絡会について）、今後のタイムスケジュール、事務役割分担、広報活動について検討した。

本部会を最終として、認定看護師教育課程準備委員会は原則解散とし、今後は、実際の教育課程運営委員が事務役割分担に基づき、準備を進めていくこととなった。

⑦については別途報告。

#### <評価・改善点>

2年間の準備事業の中で、4カ所の認定看護師教育機関への訪問、情報収集を行うと共に、各班での検討、23回の部会の開催、日本看護協会への相談、県との協議1回を行い準備を進めてきた。タイムスケジュールを作成し、見通しをもって進めたこと、部会の中に班を組織し、役割分担を行って準備を進めたこと、日本看護協会との事前相談を重ねてきたこと、等により1回の本申請で認可されたことは評価できる。今後は県との協議を密に進めていくことが必要である。

#### <来年度の計画>

認定看護師教育課程（感染管理）開設準備事業は、認定看護師教育課程が開設できたことにより本年度で終了となる。

記載責任者	小野 美奈子
-------	--------

事業名	認定看護師教育課程（感染管理）開設準備事業 A ; 感染管理スキルアップ研修
対象	宮崎県内の医療施設に勤務する看護職者で、下記の条件のすべてを満たした者 1. 実務経験 5 年以上 2. リンクナースとして活動している者、またはその任にあたる予定の者 3. すべての研修日程に参加できる者 4. 施設からの推薦を受けることができる者 ・公開講座のみの受講者 31 名 ・全日程受講者 43 名（A 日程 22 名、B 日程 21 名）
事業組織	栗原 保子、武田 千穂、勝野 絵梨奈、島内 千恵子、邊木園 幸
事業計画	<p><b>目的：</b> 宮崎県内の安全な医療の実現のために、感染管理に関するより専門的な知識及び技術を修得し、チームリーダーとして自施設の医療関連感染の予防と管理に貢献できる人材を育成する。</p> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研修プログラムを作成 感染管理スキルアップ研修会プログラム 別添資料</li> <li>2. 実施要項の作成</li> <li>3. 実施要項に基づき、県内の医療機関に開催案内を通知</li> <li>4. 研修会の実施           <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 期間；平成 25 年 9 月 14 日～12 月 13 日までの期間に計 6 回（6 日間）開催</li> <li>2) 募集定員；20 名</li> <li>3) 内容；（別添資料参照）</li> </ol> </li> <li>5. 自施設の感染管理対策及びその質向上を目的とした課題計画書作成           <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 目的；本研修会で得た学びを基に、所属する施設における感染管理の課題を明確にしてその改善に取組む。</li> <li>2) 内容；①所属する施設における自身の役割において、感染管理上優先順位が高く実践可能な課題について、具体的計画を立案、もしくは実施・評価迄を行う。 ②全体報告会において、自己の取組を発表する。</li> </ol> </li> <li>6. 全体報告会（実施・評価、発表）の実施           <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 目的；発表会を通して自施設の現状を知り、全体討議をふまえ、自施設の感染管理活動に活かす一助とする。</li> <li>2) 方法；①報告会に向けての資料作成と発表 ②発表方法；ポスターセッション方式（発表 8 分、討議 3 分） ③全体討議 ファシリテータの依頼と事前打ち合わせ</li> </ol> </li> <li>7. 調査 研修の評価を目的とした調査（自記式質問紙作成 無記名）を実施 宮崎県立看護大学研究倫理委員会 申請</li> <li>8. 最終報告書の提出           <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 内容；課題計画書を実践した内容と結果、評価を最終報告書として提出する。</li> <li>2) 時期；課題計画書発表会から 2 ヶ月後</li> </ol> </li> <li>9. 平成 25 年度感染管理スキルアップ研修会報告書の作成</li> </ol>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 感染管理スキルアップ研修会プログラムの作成 研修会の目的に則して、実践的内容のプログラムを作成した。 第 1 回目は「感染管理のための基礎知識」を、研修の導入と位置づけ、「●感染症-易感染について-」、「●微生物概論」、「●感染症-病院感染をおこしやすい微生物-」、「●エビデンスに基づく感染予防」という単元構成で進めた。第 2 回目は、「●感染管理における看護の専門性を、1 時限目に配置し、看護専門職として感染管理の質向上に向け、どのように専門性を發揮していくのか、そのリーダー性も含め講義を進め、その後、法規関連を押さえた後、</li> </ol>	

各論、演習、課題計画書作成、全体報告会という構成で作成した（プログラム参照）。

## 2. 感染管理スキルアップ研修会の実施

実施要項に基づき、県内の医療機関に開催案内を通知した。

定員 20 名（1 回目は公開講座）に対し応募が多く、43 名の受講生をもって研修会をスタートした。そのため、効果的な演習と全体報告会運営の点から、第 5・6 回目の授業より、2 つのグループに編成し直して、研修会を運営することとなった。

プログラムの実施においては、双方向性の授業が成立するよう、講義にグループワーク等を必ず取り入れ進めた。防護具装着や手指衛生の実践演習、事例を用いたグループワーク・発表、自施設の課題計画書作成の演習、ポスターセッション方式での全体報告会の実施（課題計画書発表）など、研修目的に即した学習方法・形態を工夫した。毎回、授業アンケートを実施（無記名）し、その評価を次の授業改善に活かした。

演習の課題計画書作成では、本研修会での学びを活かし、自施設の課題計画書作成に取り組んだ。受講者全員が、自施設の現状を分析し、自身の役割において実践可能かつ優先順位の高い感染管理における課題計画書（手指衛生の遵守や適切な防護具の装着への取組、ノロウィルス対策のマニュアル作成、ベストプラクティス作成と教育など）を作成し取組の結果を含めて発表できた。さらには、研修会終了 2 か月後に、取組結果と評価を含めた最終報告書を提出した。

## 3. 調査実施と結果

宮崎県立看護大学研究倫理委員会の承認を得て、研修に対する受講者への調査（テーマ；感染管理に関する看護実践能力の向上を目指した実践及び組織還元型研修の有用性と看護師による感染管理ネットワークへのニーズ調査）を実施した。

多くの受講生が研修の必要性を捉えていた。講義・演習内容については、多くの受講生が参考になる、理解しやすかった、と回答していた。講義・演習内容を研修期間中すでに実践に活かしていたと回答した受講生が多く、課題計画書立案と、その実践・発表会を組み込んだ実践的内容のプログラムに対する高評価と位置づけることができた。

また、自由記述欄では、「感染管理の専門知識を根拠に基づき学ぶことができ実践・指導に自信がもてるようになった」、「課題計画書発表会を通して、他施設の現状を知り、自施設の感染管理を評価する機会となった」、「自施設の感染管理の問題解決に活かせる方法を得ることができた」、「さらに感染管理の専門性を深めたい」、などの意見があり、研修内容に対し肯定的評価であった。

## 4. 研修終了後の最終報告書提出について

最終報告書作成手順にそって、受講生全員が報告書を提出した。

## 5. 平成 25 年度感染管理スキルアップ研修会報告書を作成した。

### <評価・改善点>

#### 1. 評価

受講者が自施設の現状を評価し、課題計画書を作成する過程において、本研修会における講義や演習で得た感染管理の専門的な知識及び技術が活かされていた。また、課題計画書発表会は、他施設の現状を知り自施設の感染管理を評価する機会となり効果的であった。その後、各自が課題計画を実践し結果を踏まえて評価できたことは、受講者がリーダーシップを發揮し、自施設の医療関連感染の予防と管理に貢献できたと考える。よって、本研修会の目的は達成できたと考える。

#### 2. 改善点

##### 1) 受講定員について

定員は当初 20 名であったが、多くの受講希望者に応えるために、日程を調整し 43 名を受け入れた。しかし、次年度は日程の都合などから当初の予定の 20 名とする。

##### 2) 研修会開催要項について

自施設の感染管理に関する課題計画書を作成する演習や全体報告会において、Word や Power point による書類作成に不慣れな受講生もいたことから、発表方法等について、事前ガイダンスをより丁寧に行う。

##### 3) 最終報告書について

報告会及び最終報告書作成と提出の過程において、社会化（学会発表等）が可能な報告書については、積極的に研究支援を行う。

4) 研修会修了書の発行について

修了書が発行できるように改善を行う。

＜来年度の計画＞

本研修会の受講者が、感染管理の基本的知識や技術を修得し、さらに専門性を高めたいと思える機会となるような、開催時期の検討が必要である。

平成 26 年度感染管理スキルアップ研修会開催（案）

1) 内容；本年度と同様

2) 対象；宮崎県内の医療施設に勤務する看護職者で本年度同様の条件を満たした者  
20 名

3) 時期；平成 26 年 6 月～7 月開催

※ 課題計画書発表会は平成 26 年 11 月、最終報告書提出は平成 26 年 12 月

記載責任者

栗原 保子

**平成 25 年度 感染管理スキルアップ研修会 プログラム**

日 時	受講者 (人)	研 修 内 容	時 間 数 (分)	講 師		
第 1 回 【公開講座】 9/14(土) 9:00~16:30	74	感染症 —易感染について—	90	宮崎大学医学部附属病院内科学講座 免疫感染病態学分野 教授 岡山 昭彦		
		微生物概論	90	宮崎県立看護大学 教授 島内 千恵子		
		感染症 —病院感染をおこしやすい微生物—	90	助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
		エビデンスに基づく感染予防	90			
第 2 回 9/27(金) 9:00~16:30	43	感染管理組織・診療報酬・関係法規など	90	宮崎県立看護大学		
		感染管理における看護の専門性	90	助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
		標準予防策 (手指消毒・PPE 装着等の演習も含む)	180	助教 勝野絵梨奈		
第 3 回 10/11(金) 9:00~16:30	43	職業感染防止策 (ウィルス感染症・針刺し切創予防)	90	宮崎県立看護大学 助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
		飛沫感染予防策(インフルエンザについて) 空気感染予防策(結核について)	90	独立行政法人国立病院機構宮崎東病院 立山 雅子 (感染管理認定看護師)		
		接触感染予防策 (MRSA、感染性胃腸炎について)	120	宮崎県立看護大学 助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
		演習にむけてのガイダンス	60			
第 4 回 10/25(金) 9:00~16:30	43	洗浄・消毒・滅菌とは	90	宮崎県立看護大学		
		人工呼吸器関連肺炎(VAP)予防策	90	助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
		膀胱内留置カテーテル関連尿路感染(UTI)予防策	90	医療法人社団 誠友会 南部病院 串間真由美 (感染管理認定看護師)		
		中心静脈カテーテル関連血流感染(CR-BSI)予防策	90	宮崎県立看護大学 助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
第 5 回 【A 日程】 11/8(金) 9:00~16:30	A日程 22	手術部位関連感染(SSI)予防策	100	宮崎県立看護大学		
		透析室における感染防止策 内視鏡室における感染防止策	90	助手 武田千穂(感染管理認定看護師)		
		サーベイランスとは(基礎編)	90			
		課題の計画書作成	170	宮崎県立看護大学 助手 武田千穂(感染管理認定看護師) 助教 勝野絵梨奈 【A日程】 社団法人宮崎市郡医師会宮崎市郡医師会病院 篠原真理子 (感染管理認定看護師) 【B日程】 独立行政法人国立病院機構都城病院 成田知穂 (感染管理認定看護師)		
第 6 回 【A日程】 11/29(金) 9:00~16:30	A日程 22	発表準備 課題計画書発表会・講評	360	宮崎県立看護大学 助手 武田千穂(感染管理認定看護師) 助教 勝野絵梨奈 【A日程】 社団法人宮崎市郡医師会宮崎市郡医師会病院 篠原真理子 (感染管理認定看護師) 独立行政法人国立病院機構都城病院 看護部長 音成佐代子 (感染管理認定看護師) 【B日程】 独立行政法人国立病院機構都城病院 成田知穂 (感染管理認定看護師)		
	B日程 21					

事業名	<b>認定看護師教育課程（感染管理）開設準備事業 B： 感染管理スキルアップ研修＜出前講座＞</b>
対象	<b>県内看護職及びコ・メディカル</b>
事業組織	<b>栗原 保子、武田 千穂、勝野 絵梨奈、邊木園 幸（宮崎県立看護大学）</b>
事業計画	<p><b>目的</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 県内医療機関の医療関連感染対策の質の向上を図る。</li> <li>2. 医療関連感染対策に関わる研修等のニーズ調査を行い、感染管理対策教育活動に活かす。</li> </ol> <p><b>目標</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 医療関連感染対策に携わる関係者が感染症に対する理解を高めるとともに、院内における感染リスク要因を理解し、医療関連感染の防止策を図る。</li> <li>2. 院内ラウンド（実地研修）を行うことで、現場でのチェックポイントを確認し、効果的な介入に結びつける。</li> <li>3. 管内の医療機関を集めた研修会を行うことで、今後の連携強化や情報交換等、地域における感染対策ネットワークの構築につなげる。</li> <li>4. 感染対策に関する意識調査及び研修等の教育ニーズ調査を行い、感染管理対策教育プログラムの開発等、今後の活動に活かす。</li> </ol> <p><b>実施内容：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 感染管理スキルアップ研修＜出前講座＞プログラムと実施要項の作成</li> <li>2. 依頼のあった保健所及び医療機関との協同で研修会の実施</li> <li>3. 調査 研修の評価を目的とした調査（テーマ；感染管理に関する実践能力の向上を目指した出前方式体験型研修の有用性と看護師による感染管理ネットワークへのニーズ調査）を実施する。宮崎県立看護大学研究倫理委員会 申請</li> <li>4. 平成 25 年度 感染管理スキルアップ研修＜出前講座＞ 報告書の作成</li> </ol>
<p><b>&lt;実施状況及び結果&gt;</b></p> <p>1. 感染管理スキルアップ研修＜出前講座＞プログラムと実施要項の作成</p> <p>研修会の目的に則して、一斉講義、事例検討、院内ラウンドで構成する実践的内容のプログラム（半日研修）、実施要項を作成した。感染管理スキルアップ研修会が中央集合研修という位置づけであるのに対し、幅広く草の根的に質向上に貢献するという目的で企画したものである。</p> <p>2. 感染管理スキルアップ研修＜出前講座＞の実施</p> <p>実施要項に基づき、2 保健所 3 医療施設との共催で 3 回実施した。また、医療施設が拠点となって近隣の医療施設及び介護施設にも開催案内を行ったところ、毎回、10～15 施設の参加があり、コ・メディカルも含め、延べ 250 名が受講した。</p> <p>事例検討では、時期を考慮し、早期に対応が可能だったと捉えられるノロウィルス感染の事例を活用した。また、組織的に取組む必要のある感染対策への意識を強化する目的で、病室-病棟-院内-院外での対策行動を全体的な視野で捉えられるようにした&lt;宮崎県立看護大学版演習フォーマット&gt;を活用し展開した。</p> <p>院内ラウンドについては、当該施設の業務に支障を来さないように、各医療施設の代表者によるグループ編成を行い、実施した。また、ラウンドにおける感染対策の視点を強化する目的で、CDC ガイドラインを基に作成した&lt;宮崎県立看護大学版 院内ラウンドシート&gt;を活用した。ラウンド終了後のグループワーク・全体会を通して、感染対策強化への</p>	

視点とその方法を共有した。

研修終了後、当該医療施設に、院内ラウンドの講評結果を報告した。これは、施設内の感染対策の一助となることを目的としたものであり、改善のための具体的なポイントとその根拠を含む報告書とした。

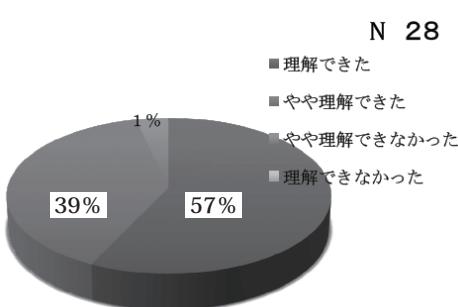
### 3. 調査実施と結果

宮崎県立看護大学研究倫理委員会の承認を得て、研修に対する受講者への調査（テーマ；感染管理に関する実践能力の向上を目指した出前方式体験型研修の有用性と看護師による感染管理ネットワークへのニーズ調査）を実施した。

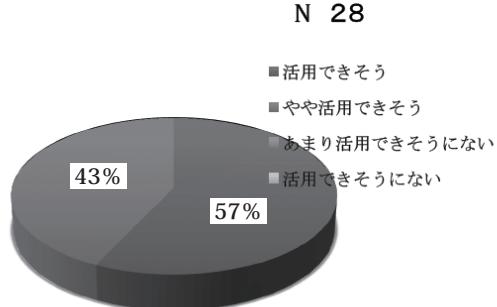
調査結果より、感染対策への知識が深まり、実践にすぐに活用できる内容だった、等肯定的評価であった。院内ラウンドの評価の一部を下記に示す。また、自由記述内容からは、それぞれの受講者が感染管理に対する知識と技術の獲得ができ、個人に留めるのではなく、組織に還元しようとする意識が伺えた。

#### 実地研修＜ラウンド＞の評価 一部

●ラウンドシートの項目について  
それぞれの根拠は理解できましたか



●ラウンドシートは、自施設においても  
活用できそうですか



### 4. 平成 25 年度 感染管理スキルアップ研修＜出前講座＞ 報告書を作成した。

#### ＜評価・改善点＞

##### 1. 評価

感染対策への理解を高めることができた。また、院内ラウンド（実施研修）の導入は、受講者が自施設の感染対策の現状を比較・分析する機会となっていたことが明らかになりました、受講者の医療関連感染対策の意識の強化につながったと評価できる。

また、管内の医療機関を集めた研修会を実施できたことで、今後の連携強化や情報交換に向けた仕組みづくりの基盤を創ることができた。

よって、本研修会の目的は達成できたと考える。

##### 2. 改善点

院内ラウンドの実施は、当該医療機関の協力なしでは実施できないプログラムである。ラウンドを通して、当該施設の感染対策の現状と課題が浮き彫りになってしまいういう結果を踏まえて、より良い活動へと貢献できるような取組を行っていく必要がある。

#### ＜来年度の計画＞

実施要項に基づき実施する。

1 医療機関からの依頼においても、25 年度と同様日程調整がつけば実施することとする。

#### 記載責任者

栗原 保子